

『したくない事はないでせう』

『え』

『君は今あの男と女を見て、冷評しましたね、あの冷評のうちに君が戀を求めながら相手を得られないといふ不快の聲が交つて居ませう』

『そんな風に聞こえましたか』

『聞こえました。戀の満足は味はつてゐる人はもつと暖かい聲を出すものです。然し……然し君、戀は罪惡ですよ。解つてゐますか』

私は急に驚かされた。何とも返事をしなかつた。

十三

我々は群集の中にあつた。群集はいづれも嬉しうな顔をしてゐた。其處を通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来る迄は、同じ問題を口にする機會

がなかつた。

『戀は罪惡ですか』と私が其時突然聞いた。

『罪惡です。たしかに』と答へた時の先生の語氣は前と同じ様に強かつた。

『何故ですか』

『何故だか今に解ります。今にぢやない、もう解つてゐる筈です。あなたの心はとつくの昔から既に戀で動いてゐるぢやありませんか』

私は一應自分の胸の中を調べて見た。けれども其處は案外に空虚であつた。思ひ中る様なものは何にもなかつた。

『私の胸の中には是といふ目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはゐない積です』

『目的物がなから動くのです。あれば落ち付けるだらうと思つて動きたるのです』

『今それ程動いちやゐません』